

スピリチュアリティに基づいた環境保護活動の形態的特徴

ーディープ・エコロジー運動を事例としてー

黒田 純一郎

第1節：はじめに

第1項：先行研究

1970年代以降の先進諸国では、既成宗教の弱体化にともなって、非制度的な現代的宗教性に対する関心が増加傾向にあると指摘されている。しばしば「スピリチュアリティ」と概念化されるこうした宗教性の特徴を理念的に述べてみると、おおよそ下記のようなになるだろう。

1. 人間は本来的に聖性を内在している、あるいは聖性と連続しているのだが、家族・会社・宗教などに代表される近代的社会制度によって、それを失っている、または抑圧しているという信念に基づいていること。また、こうした観点に基づいて、しばしば全体社会の主流伝統(キリスト教や近代合理主義)に対して批判的立場をとること。
2. 聖性は、共同体内における体系的教義の学習や儀礼の実践によってではなく、個々人の自発的探求の結果として生じる体験によって開花するとみなしていること。また、こうした観点に基づいて、しばしば諸宗教をブリコラージュ的に混淆した信念体系を有していること。⁽¹⁾

一般に、このような意味でのスピリチュアリティが最も顕著に示された現象は、1970年代に発展したニューエイジ運動であると考えられている。実際、90年代頃までのスピリチュアリティ関連研究のほとんどはニューエイジ運動を対象としたものであった。しかし、2000年代頃を境に、ニューエイジ運動のような宗教という分化した特殊な機能領域における現象のみならず、様々な他の文化領域、たとえば医療、教育、エコロジー、といった領域における現象にもスピリチュアリティの現われを見出すことができるという立場に立った研究が増加傾向にある。具体的には、公教育における「いのち」という語彙の重視⁽²⁾、ターミナル・ケアやグリーフ・ケアにおける実践者の認識や患者の回復過程、反原発運動における生命主義的観点の重視⁽³⁾、などについての研究が挙げられる。

以上のような研究動向を背景として、近年、スピリチュアリティとエコロジーの関係性をテーマとした研究が増加しつつある。具体的には、映画『地球交響曲』とその自主上映団体にスピリ

チュアリティが観察されると指摘する研究⁽⁴⁾、環境活動家中野民夫の分析からスピリチュアリティが平和主義と結び付けられていることを指摘する研究⁽⁵⁾、テキサス州の環境保護運動参加者に対する質的調査から生活居住区の自然を基盤としたスピリチュアリティとエコロジーの結合について指摘する研究⁽⁶⁾などが挙げられる。しかし、意外なことに、こうした諸現象の源流ともいえる「ディープ・エコロジー運動」⁽⁷⁾については、これまで詳細には扱われてこなかった⁽⁸⁾。

第2項：本稿の課題と方法

以上を踏まえて、本稿では、ディープ・エコロジー系ワークショップ「全生命の集い」とディープ・エコロジー系活動団体「アース・ファースト！」による自然保護活動を取り上げ、活動がどのような構造的特徴を有しているのか、またそれらの特徴はスピリチュアリティとどのように関係しているのかといった点について明らかにすることを目的とした研究をおこなうこととした。

ここで「全生命の集い」と「アース・ファースト！」という2つの活動を取り上げるのは、いずれの活動も運動の内外からディープ・エコロジー運動を代表する活動とみなされているためである⁽⁹⁾。他の諸活動としては①通常の行政区画とは異なる新しい生活区画に基づいたライフスタイルを追求するある種の代替的コミュニティ活動⁽¹⁰⁾、②選挙への出馬、ロビイングなどを通して議会への介入を試みる活動、などを挙げることができる⁽¹¹⁾。しかし、管見の限りでは、これらがディープ・エコロジー運動の代表的活動として取り上げられた例はみられない。

2つの活動を同時に取り上げるのは以下の理由による。すなわち、分析の先取りになるが、「アース・ファースト！」は比較的大規模に自然保護活動をおこなう明確な社会運動であるのに対して、「全生命の集い」は小集団内で意識変容に取り組むセミナーである。つまり、両者はディープ・エコロジー運動の活動形態としては極めて対照的な方向性を持つものであり、両者を比較することによってスピリチュアリティと活動形態の関係性について浮き彫りにできると考えたためである。

次に、ディープ・エコロジー運動のなかでも、そのエッセンスが凝縮されたアルネ・ネスやビル・デヴァルとジョージ・セッションズのような初期思想家の言説ではなく⁽¹²⁾、ワークショップと自然保護活動という具体的な活動に着目し、その構造的特徴の解明を課題とするのは、信念の次元ではなく行為の次元に焦点を合わせることによってスピリチュアリティと共同性・公共性という、今日、当該研究領域で大きな関心を持たれているテーマについて論じることができると考えたためである。これまで、スピリチュアリティは個人主義的傾向が強い消費主義的サブカルチャーとして展開している、とみなされることが多かった⁽¹³⁾。しかし近年では、スピリチュアリティが時に当該社会において抑圧されがちな属性（たとえば女性やアルコール中毒）を持つ人々を結びつける契機となっていると指摘する研究や、スピリチュアリティを基盤として公共圏へ参与する諸活動が存在していると指摘する研究などが増加しつつある⁽¹⁴⁾。こうした論点を扱うためには、ディープ・エコロジストがなにを考えているのかと同時に、なにをおこなっているのかに注目することが必要であろう。

分析は下記のような手順にしたがっておこなった。まず、それぞれの活動の創始者の言説に着目し、活動の理念や目的について、特にそれがスピリチュアリティとどのように関係しているかを調べた。先にも述べたとおり、スピリチュアリティは、自己に内在する聖性を体得することに

よって近代社会を超越する、という論理を基本としている。これを踏まえて、分析に際してはそれぞれの論者の現状認識、およびその解決策、という2点に着目した。つぎに、それぞれの活動の運営構造について、その特徴を調べた。具体的には、制度化の度合い、構成員の結合様式、結合の持続性に着目した。さいごに、それぞれの活動の具体的な実践過程について、その過程で活動主体間、あるいは活動主体と外部社会との間にどのような相互作用が生じているのかを調べた。

第2節：環境保護団体「アース・ファースト！」

第1項：団体設立の経緯とその理念

「アース・ファースト！」は、1980年に中心人物であるデイブ・フォアマンを含む5名の活動家によって設立された環境保護団体である。創設者のフォアマンは、北アメリカにおいて最も強い勢力を有する環境保護団体のひとつ「ウィルダネス・ソサエティー」に1980年まで所属していた環境保護活動家である。フォアマンは、「ウィルダネス・ソサエティー」が国家の環境政策に対して迎合的な態度をとるようになり始めたこと、さらには一部企業との法的調停に活動内容が偏り始めたことなどが「アース・ファースト！」設立のきっかけになったと回顧している⁽¹⁵⁾。設立当初の団体綱要は以下のようなもので、その団体名が示すとおり「地球」の救済が第一義的な目標として掲げられている。

自然保護活動家の大多数が持っている見解を誠実に述べる...疲れて想像力をなくした環境保護運動に、活気と喜び、熱意をよみがえらせる...環境保護団体の妥協政治や吸収戦術に嫌気がさした多くの強硬派の自然保護活動家に、はげ口を与える...新しい世界観、生命中心のパラダイム、地球哲学の発展を促す。妥協を知らない情熱をもって、地球のために戦う。⁽¹⁶⁾

フォアマンは、以上の目標を達成するための思想的基盤として、ディープ・エコロジー的な哲学を団体の理念に取り入れている。たとえば、1987年の会報に載せられた団体の原則のなかでは、次のように述べられている。

ディープ・エコロジー、あるいは生命中心主義の哲学を取り入れること／この哲学は簡潔かつ本質的に、あらゆる生命体と生物共同体は本質的意義、固有の価値を有する存在であることを示している... [ディープ・エコロジー的な哲学は] 「資源としての自然」という近代的概念を否認する。ユダヤ＝キリスト教、イスラム、資本主義、マルクス主義、科学主義、世俗的ヒューマニズムといった今日の支配的な哲学は人間中心主義的である。これらは人間を宇宙の中心に位置づけ、自然から分断し、特権的な価値を持つ存在としている。我々の哲学は、よりエコロジカルな視座を持つものであり、地球を共同体として理解し...人間に明白な害をなす生命すらも、複雑で活気に満ちた生態系のなかの極めて重要で必須の構成要素とみなす。⁽¹⁷⁾

以上のように彼は、ディープ・エコロジー運動の理念を人間中心主義と対比しながら、あらゆる生命体に固有の価値を付与する哲学として理解している。フォアマンにとって、人間は生態系の

一部をなす存在に過ぎず、その意味で他のあらゆる生命体と平等な存在である。したがって、人間は「複雑な生態系に調和したかたちで生きてゆかなければならない」⁽¹⁸⁾、とフォアマンはいう。このような観点から、フォアマンは今日の自然破壊を批判する。もちろん、フォアマンも人間が「生命を維持するために必要なニーズ」を満たすために動植物を殺害することは認めている。しかし、そうした「ニーズ」を過剰に超えた欲求を満たすための自然開発は、自然の固有価値を侵害する行為であるとして強く反対している⁽¹⁹⁾。

以上のような自然の固有価値に対するフォアマンの理解は、時に神秘的な色彩を帯びることすらある。たとえば、フォアマンは原生自然＝人為の介入していない状態の自然について次のように述べている。

〔原生自然は〕人々にとって聖なる神殿に等しいものである。しかし、原生自然はそこに固有の複雑性を保有しているというそれ自体のあり方によって、聖性すらも超越している。そこは善と悪を超えた場所であり、存在がありのままに存在することができる場所である。⁽²⁰⁾

フォアマンによれば、以上のような聖性（あるいはそれを超越する何か）は、知的に学習することによってではなく、自然を体験することによって感覚的に理解されるべきものである。フォアマンの言い方にしたがえば、「〔自然の固有価値という〕究極的な真実は、図書館のなかで勉強することによってではなく、野生のなかに静かに腰掛けることによってこそ理解することができる」⁽²¹⁾。

このような観点から、フォアマンは「アース・ファースト！」を、自然が持つ固有の価値を保護するために戦う戦士の集団として位置づけている⁽²²⁾。以上のようなフォアマンの理念、すなわち、人間中心主義的な伝統によって引き起こされた環境危機を、聖化された自然の固有価値という観念を体得することによって克服するという発想は、スピリチュアリティの論理と近接している。しかし、上記引用にも示されているように、ここでフォアマンが体得される「聖性」の基盤を自然という外的な存在に求めている点には注意する必要がある。実際、フォアマンは、自己変容体験によって個人が何らかのかたちで聖性を獲得するという観念に対しては批判的な見解を示している。フォアマンによれば、自己の意識変容に固執することは、活動の活発性を萎縮させることにつながる。また、自己意識の進化を謳うことは、自らを自然から隔絶した超越的存在として位置づけることにもつながり、人間が本来的には動物として生態系の一部に組み込まれていることを無視することになる、とフォアマンはいう⁽²³⁾。たとえば、フォアマンは次のように述べている。

アース・ファースト！ はニューエイジャーの夢見がちなエコ思想、我々は動物としての本性を超越してより高次の道徳的な存在になるために進化しなければならないという考えを拒否する。⁽²⁴⁾

このように述べた上で、フォアマンは、「アース・ファースト！」の哲学が「西海岸のヒッピーたちによって乗っ取られる」⁽²⁵⁾ことのないように警鐘を鳴らしている。以上のように、フォアマ

ンが示す「アース・ファースト！」の理念は、近代批判や体験主義という点ではスピリチュアリティと近接しているものの、スピリチュアリティの骨子である自己に内在する聖性の観念を共有していないという点では低い関連性しか持っていない。「アース・ファースト！」の場合は、どちらかといえば自然を神聖化するという意味での自然宗教的側面がスピリチュアルな側面を上回っているといえるだろう。

第2項：団体の運営構造

つぎに、団体の運営構造についてみていこう。この団体の基本的な構造は、「サークル・オブ・ダークネス」と呼ばれる本部と、各地域で保護活動を実行する支部によって構成されている。代表的な支部にはオレゴン支部、カリフォルニア支部、レッドウッド支部などがある。本部と支部の間には明確な上下関係が存在するわけではなく、本部が示した大まかな方向性にしたがって各支部はそれぞれ独自に保護活動を実行するという形態が一般的である。本部会員や支部の幹部会員は常勤の専門環境活動家であるが、全体のなかで占める割合は低い。大部分の構成員は、保護活動の専門家として団体に勤務しているわけではなく、支部には所属しつつも他の職に就きながら、特定の保護活動が実行される度に集合する、いわばパートタイムの環境活動家である。またこの他にも、団体に所属しているわけではないが、雑誌購読や寄付によって団体の財政に寄与している支持者たちも複数存在している。この団体が発行する会報によれば1984年の段階で8000人近くの会員を獲得したと報告されている⁽²⁶⁾。こうした組織構造をとる理由について、フォアマンは以下のように述べている。

アース・ファースト！はいかなる組織も作らないことに決めた。役員も規約も会則もなし、法人格も税控除もできない、ただの、地球にコミットした女性と男性の集まりだ...我々も、もし産業国家的な組織を踏襲すれば、オーデュボン協会やシエラ・クラブがそうなったように、彼らの人間中心的パラダイムを受け入れることになってしまう。⁽²⁷⁾

以上のように、この団体は本部 - 支部 - 支持者という階層構造を持ちつつも、個々の小集団、あるいは個々の会員の独立性は高い状態に保たれており、明確なヒエラルキーに基づいた制度化はなされていない。しかし、制度化の程度が低いからといって、この団体が全く無軌道に運営されているというわけではない。この団体では、以下で挙げるような複数の媒体を用いて、運動としての統一性を維持している。

第一の媒体は1980年の創立時から年1、2回の頻度で発行されている会報「アース・ファースト・ジャーナル」である。この会報は「サークル・オブ・ダークネス」に所属するメンバーによって編集されており、ディープ・エコロジーの理念などを扱った思想的性格が強い記事の他、人口問題や自然保護など特定の問題を扱った論考、団体によって実施された保護活動の報告等、多種多様な記事内容によって構成されている。1984年からは読者投稿欄も設けられ、一般の会員もある程度内容に関わることができるようになっていく。この会報を通じて、個々の会員は団体の信念と情報を共有することができる。

第二の媒体は、「ラウンド・リバー・ランデブー」と呼ばれる団体集会である。この集会もまた 1980 年より継続的に、おおむね年一回の頻度で開催されている。1984 年の段階で 1000 人を超える会員が出席しており、1990 年代には数千人規模で実施される場合もあったという⁽²⁸⁾。この集会では、デイブ・フォアマンらによる演説や、活動方針についての討論などがおこなわれる他、キャンプ・ファイヤーを囲んでの宴会なども催される。また、1980 年代中頃からはネイティブ・アメリカンの宗教儀礼がおこなわれていたとも報告されている⁽²⁹⁾。この集会に参加したある会員が以下のように述べているとおり、「ラウンド・リバー・ランデブー」はともすれば社会で好奇の目にさらされることもある熱心な保護活動家たちの憩いの場として機能していたようである。

ラウンド・リバー・ランデブーではスピリチュアルな高揚感を味わうことができる。この集会に参加すれば、自分と同じように考えている人が他にもいるんだということがわかるし、自分の思っていることを素直に話すことができる。私にとって、ラウンド・リバー・ランデブーは仲間と思える人々と会うことができる唯一の場なんだ。⁽³⁰⁾

第三の媒体は、団体が展開する比較的規模の大きい保護活動キャンペーンである。上述の通り、この団体は通常、独立性の強い支部がそれぞれの判断で保護活動をおこなっているが、場合によっては全国規模でのキャンペーンが展開され、各支部の会員が動員される。具体的な例としては、1987 年に全米規模で実施された飲食店チェーン「バーガー・キング」に対するボイコット運動が挙げられる。当時「バーガー・キング」は第三世界で大量の森林・牧草を消費することによって飼育・量産された安価な牛肉を輸入していた。「アース・ファースト！」は、関連する団体「熱帯雨林ネットワーク」と共にこの件を問題視し、輸入の停止を訴え商品のボイコットを開始した。ボイコットには「アース・ファースト！」に属する多数の会員、支部が参加したとされている。結果的に「バーガー・キング」は売り上げが 12%減少することとなり、最終的に輸入を停止した⁽³¹⁾。

以上のような複数の媒介によって、支持者を含めた構成員は、いわばネットワーク的に結び付けられている。もっとも、これらの媒介によって成立している統一性は、常に平穏なたちで維持されてきたわけではなかった。本部が大きな権威を持たないことに起因して団体内に内部対立が生じたのである。このような対立は、1980 年の団体設立時からしばらくの間、すなわち、構成員の大部分が既存の保護団体に限界を感じた保護活動家によって占められていた時期にはそれほど顕著なものではなかった。しかし、1990 年頃、団体規模が拡大するにつれて保護活動家以外の人々が団体に関与するようになった頃から対立が目立つようになり始めた。特に顕著な対立は、創始者であるフォアマンと、「アース・ファースト！」カリフォルニア支部に所属するジュディ・バリとマイク・ロッセル間で生じた団体方針をめぐる対立であろう。上述の通り、フォアマンは「地球を第一」にすることを団体の主軸としていたが、バリとロッセルはより社会正義に重点を置くべきではないのかと主張し、フォアマンを「自然保護という悪夢に取り付かれている」⁽³²⁾と批判した。この対立は、事実上、団体を二分するほどにまで拡大し、末端会員の間にも不和をもたらした。たとえば、ある一般会員は次のように述べている。

私が外に出ると、旦那が女性〔の社会的地位をめぐる〕問題について仲間としゃべっているんです。でも、私たちは女性や人間のことを解決するために集まっているんじゃない。環境をどうしようかという話をするべきなんですよ。⁽³³⁾

この対立は、最終的にフォアマンの「アース・ファースト！」脱退という事態を招くに至った。このような対立の存在は、広範囲にわたるネットワークを統御するだけの凝集性、それを長期間にわたって維持するだけの持続性が、この団体の運営構造に乏しいことを示している。

第3項：団体の活動内容

では、彼らは、具体的にどのような方法によって自然を守ろうとしているのだろうか。この団体の場合、特に重視されるのは草の根保護活動、すなわち、小集団によって非公式に遂行されるゲリラ的保護活動である。具体的な活動として、最も頻繁に実行されているのは、座り込みによって森林伐採を間接的に阻止させようとする活動である。これは、複数人の活動家が森林伐採の現場を占拠し、伐採活動の遂行を阻止しようと試みるものである。

やや特殊な形態として「樹上座り込み」という手段が用いられることもある。現在、「樹上座り込み」の最長記録⁽³⁴⁾を保持しているジュリア・ヒルの活動記録によれば、この活動は伐採対象となっている樹木の樹上にテントを張り、そこで長期間にわたって生活することによって伐採を阻止しようとするものである。また、座り込みによって伐採計画、開発計画を白日の下にさらし一般の人々の環境意識を高めることも目的のひとつであるとされている。通常、座り込みによって伐採が中断されている間に他の会員が業者と交渉に望むことになっているようだ。

ヒルの活動記録には過酷な樹上生活がつづられているが、特に問題になったのは伐採作業員との間に生じた軋轢だったという。ヒルによれば、樹上生活中、複数回にわたって作業員が樹に登り、彼女を引き摺り下ろそうとしたとされている。また、樹上にいる彼女に物資を供給しようとした支援者と作業員の間でも紛争が生じたとされている。さらには伐採予定地区に侵入していた彼女の支援者が倒された樹の下敷きになり死亡することもあったという⁽³⁵⁾。

以上の活動に対して、より直接的に森林伐採を阻止しようとする試みも提案されている。これは俗に「エコタージュ」(エコ+サボタージュ)、あるいは「モンキーレンチング」と呼ばれる手法で、具体的には、ブルドーザーなど伐採に使用される機器を破壊するという手法である。この手法は、1975年に出版されたエドワード・アビーによる小説『モンキーレンチ・ギャング』でおこなわれた活動が原型となっている、同小説内で2人の若者ボニーとドックは開発中の牧場付別荘地に侵入し、看板、開発に用いられる機器などをチェーンソーで破壊して回った⁽³⁶⁾。アビーのこの小説に強い感銘を受けたフォアマンは、『エコ・ディフェンス—野外でのモンキーレンチの使い方—』でより洗練されたテクニックとしてこの種の妨害活動をマニュアル化している。このマニュアルによれば、「モンキーレンチング」とは

自然の多様性を破壊する機械のギアのなかにモンキーレンチを投げ込むという、自然を守るための、英雄的で明らかに不法な行為である。この戦略的モンキーレンチングは安全で、簡

単であり、楽しみにもなりうる。そして最も重要なことは、モンキーレンチングが樹木の伐採や道路建設、過度の放牧、石油・ガス開発、鉱山業、ダム建設、送電線建設、オフ・ロード車の利用、わなの設置、スキー場開発、そしてその他の原生自然を破壊する形態の阻止に効果的でありうるということである。⁽³⁷⁾

この引用に続いて、フォアマンは、「モンキーレンチング」は個人的、あるいは小集団によって実行されるゲリラ的な戦術であり、決して人間を対象としたものではない非暴力活動の一種であることを強調している。フォアマンによれば、彼らの意図はあくまで機械類を攻撃することによって開発業者に経済損失を生み、開発事業を停止させることにある。

マーサ・リーの調査によれば、これらの戦略は現実に実行されており、彼女のインタビュー調査では複数人の会員がモンキーレンチを用いた破壊活動をおこなったと証言したという。確認できる記録では、「アース・ファースト！」の会員がアラバマ州の送電線を破壊し、連邦捜査局に逮捕される事件があったという。ちなみにこの破壊活動により、近隣の原子力発電所でメルトダウンが発生する可能性が生じたとされている⁽³⁸⁾。

直接的な破壊活動の他、「アース・ファースト！」では樹木に釘を打ち込むことで間接的に伐採器具(チェーンソー)を損傷させようとするキャンペーンが展開されることもある。このキャンペーン中に、少なくとも一人の伐採作業員が、幹から跳ね返され彼の首へ飛んできたチェーンソーによって重傷を負ったとされている⁽³⁹⁾。この件は、後に「アース・ファースト！」内でも問題視され、『エコ・ディフェンス』のさらに2年後に出版された同書の第2版では、伐採作業員の接近を阻止するために釘は十分に木から頭を出していなければならないという説明が加えられている⁽⁴⁰⁾。

以上のように、「アース・ファースト！」による一連の保護活動は極めて過激であり、またいうまでもなくその大部分が非合法である。これらの活動は、団体と労働者、および国家との間に深刻な軋轢を生み出しており、団体と外部社会との関係は非常に対立的なものとなっている⁽⁴¹⁾。結果として、「アース・ファースト！」は、多くの論者から批判されている⁽⁴²⁾。「エコテロリズム」というラベリングは、その最も代表的なものだろう。しかし、逆に言えば、これらの諸活動は、その帰結はともかくとして、運動体外部の集団との積極的な交渉を試みるものであり、その意味では公共の次元への強い志向性を有しているといえる。こうした点から言えば、「アース・ファースト！」は、スピリチュアリティが公共圏への積極的参与を志向する社会運動として展開された事例として理解することが可能であるように思える。もっとも、本節第1項で述べたとおり、「アース・ファースト！」の理念は必ずしも自己に内在する聖性の体得による近代社会の超克という典型的なスピリチュアリティの論理と連続してはおらず、あくまでも近代批判と体験主義に基づく広い意味でのスピリチュアリティのバリエーションとしての意味においてにすぎない。したがって、次により典型的な論理に基づいた活動にも目を向けておく必要があるだろう。

第3節：ワークショップ「全生命の集い」

第1項：ワークショップ開発の経緯とその理念

「全生命の集い」とは、講義、瞑想、身体技法などを複合させたエクササイズによってディープ・エコロジー的な世界観の獲得を目指す有料のワークショップである。このワークショップは、1985年に環境活動家ジョン・シードとジョアンナ・メイシーによって開発された。メイシーによれば、最初のワークショップは1985年3月初旬にシドニー郊外でおこなわれ、参加者は40人ほどだったという⁽⁴³⁾。

いうまでもないことではあるが、シードとメイシーがこのようなワークショップを開発したのは今日の環境問題に危機感を感じてのことである。主にシードによって作成されたこのワークショップの運営マニュアルは、次のような文章からはじめられている。

地球が危機に瀕している。私たちはみな、意識のどこかでそのことに気づいている。加速しつつある生態系の悪化は地球上の生命の存在を脅かしており、いまやそれは...だれの目にも明らかだ。⁽⁴⁴⁾

これに続けてシードは、現在、複数の立場から環境問題に対応しようとする努力がなされているが、これらの対応は「現代文明の根本的な前提や価値観に疑問を投げかけ」ておらず、「環境危機の一部の徴候にしか対処しようとしていない」ために不十分なものである⁽⁴⁵⁾、という。シードは、こうした部分的な対応を越えた根本的対応に至ることができない理由は、現代社会のいたるところで人間中心主義的な世界観が蔓延しているためだ、という。シードによれば、「人間中心主義」とは「人間が万物の頂点に立ち、すべての価値の根源であり、万物の基準であるとする」⁽⁴⁶⁾ 考え方である。シードは、このような人間中心主義がユダヤ＝キリスト教、マルクス主義、ヒューマニズムといった西洋における様々な思想潮流によって人々の文化と意識に深く埋め込まれた結果、人間と自然が文化的に分断される状況が形成されることとなった、という。このような観点からシードは、環境問題の根本的解決のためには、人間と自然の関係性を再定位する(あるいは本来の関係性に戻す)必要がある、という。たとえば、シードは以下のように述べている。

人間は生物共同体のただの一員にすぎず、この共同体に対する私たちの傲慢さは、人間ばかりではなくすべての生命を脅威にさらしている。私たちは「他の存在たちをあるがままにあらしめる」こと、他の生物種を支配せず、それぞれに進化の道を歩ませること...生命世界は人類を頂点とするピラミッドではなく、全てが互いに結びついた輪をなしていること...環境とは私たちの「外」にあるものではないこと、そして空気や水や土を汚すことは自分自身を汚すことだということも知らなければならない。⁽⁴⁷⁾

しかし、シードは、以上のような内容が知的に理解されるだけでは不十分であるという。シードによれば、「この知識は私たちのなかにしみわたり私たちのアイデンティティそのものの一部にならなければならない」⁽⁴⁸⁾。真に必要とされているのは、個々人の意識変革によって、生態系の一部としてのアイデンティティを内面化することである。意識変革が達成されることによって、

人間は「両生類，爬虫類，原始哺乳類の身体感覚を取り戻すことができ...個人はおろか人間の領域さえ超え...他の生き物たちとの自覚的な自己同化」⁽⁴⁹⁾を経験することができる，とシードは論じる。こうした意識変革に伴う認識の変化を，シードは以下のように記述している。

自然からの疎外感が弱まり，人間はもはや自然界のよそ者ではなくなる。人間であることは，単に自分という存在のもっとも最近の段階として認識されるにすぎなくなる。そして，人間という段階だけが自分であると思わなくなるにつれて，私たちは哺乳類や脊椎動物としての自分，つい最近，森から現れたばかりの生き物である自分と接触できるようになってくる...「私が森を守る」という考え方が「私は自分を守る森の一部だ。最近思考に目覚めた熱帯林の一部なのだ」という考え方に変わっていく。⁽⁵⁰⁾

このような認識の変化を，シードは「意識の進化」として理解している。シードによれば，今日の環境危機は人間が意識の次元で進化する契機である。たとえば彼は次のようにいう。

私たちに必要なのは，放射能に対する新たな抵抗力を養うといった変化ではなく，意識の変革である。...意識もやはり，他の全てと同じ法則にしたがって生まれ，進化してきたものに違いない。環境の圧力によって形作られた私たちの祖先の心は，これまでも何度となく自己超越を迫られてきたはずだ。⁽⁵¹⁾

このように述べた上で，シードは次のように論じる。すなわち，こうした意識の進化を実現するために必要な知識は，既に人間のなかに埋め込まれている。したがって，自己変容は人間に内在する無意識的な知識に「気づく」こと，あるいは知識を「思い出すこと」によって達成することができる。しかし，現代社会におけるほとんどの人々には人間中心主義的な自己意識が生まれたときから刷り込まれているため，たとえ自己変容を主体的に目指したとしても，これを妨げる政治的，経済的，社会的，文化的な障害に直面することになる。このような障害は，意思の力によって，つまり頭で考えることのみによって取り去ることは難しく，古来より伝わる儀礼，呼吸法などの身体技法，あるいはセラピー的なグループワークといった特殊な技法の助けを借りる必要がある。

以上のように論じた上で，シードはワークショップ「全生命の集い」を「今日の主流文化と制度によって条件付けられた萎縮した自己感覚から，もっと大きく，もっと古くて粘り強い，本当のエコロジカルな自己感覚への一大シフトを目指す」⁽⁵²⁾活動として位置づけている。

以上でみてきたように，シードの現状認識は，フォアマンと同様，「人間中心主義」的伝統によって環境危機が引き起こされている，というものである。フォアマンの場合とは異なり，シードはこの解決策として自己意識の変容による自己の進化という方法を積極的に評価している。シードにとって，自己変容とは人間と自然の本来の一体性に「気づく」ことを意味しており，そのような変化は「意識の進化」を意味している。ここには，自己変容によって自己自身が聖化されるという，スピリチュアリティの典型的な論理を見出すことができるといえよう。

第2項：ワークショップの運営構造

つぎに、ワークショップの運営構造についてみていこう。このワークショップは、通常、特定の環境活動団体、ないしは支援団体の助成を受けた活動家によって主催される。「全生命の集い」の場合は、開発者であるオーストラリアの活動家ジョン・シード、および彼が所属する保護団体「熱帯雨林情報センター」によるもの、および、アメリカの活動家ジョアンナ・メイシーによるものが代表的である。いずれも、現在のところ、月に1、2回程の頻度で実施している⁽⁵³⁾。

「熱帯雨林情報センター」はオーストラリアの保護活動団体であるが、その主な活動はデモや直接行動であり、ワークショップの運営を専門としているわけではない。これに対してメイシーは、カリフォルニア総合学研究所に所属する学者ではあるが、その活動の主体は著作の執筆とワークショップの運営である。しかし、彼女はいわば個人活動家であり、特定の団体に所属して自身の活動を展開しているわけではない。このように、いずれの場合も、ワークショップの運営それ自体を目的とした組織的基盤には依拠して活動をおこなっているわけではない。換言すれば、このワークショップの運営構造は、それほど明確には制度化されていないということである。

さて、ワークショップの主催者は、実施する場所と日時を確定した後、主としてインターネットを通じて参加者を募る。マニュアルによれば、実施場所に制限はなく、グランドキャニオンや森林のなかでおこなわれることもあれば、学生ホールや体育館などの屋内でおこなわれることもある。実施期間についても同様に、特に制限は設けられていないが、1～3日間の午前から夕方までのプログラムとして提供されることが多い。マニュアルでは、参加者の属性（年齢、および性別）に、大きな偏りがあることは少ないと述べられている。さらに、一回あたりの参加者数については、10人の場合もあれば、100人以上の場合もあると述べられている。

ほとんどの場合、ワークショップに参加するためには一定の額の参加費を支払う必要がある。参加費は、ワークショップの内容や長さによって異なるが、平均的には1日あたり100ドル程度が基本である。場合によっては、学生、および無職者に対しては割引が適用される⁽⁵⁴⁾。

このように、このワークショップの運営形態は、ワークショップの理念で追求されている自己変容体験を、ある種のサービスとして売買するという商業的な構造をとっている。マニュアルやインターネット上の記事で確認する限りでは、このワークショップ以外で参加者が再び集合するようなシステムはみあたらない。参加者は数日以内にほぼ全て入れ替わり、再び同じ形で集合することは稀である。換言すれば、参加者は、一回起的なワークショップでの共同行為のみによって結合されており、ワークショップの運営構造は、「アース・ファースト！」の場合と比べると、相対的に一過性の強いものであるということである。

また、ワークショップが有料の商品として売買されているという点を踏まえれば、ワークショップで形成される共同性に参与する構成員が、あらかじめ構造的に制限されているという可能性を指摘することもできるだろう。ワークショップに参加するためには、こうした活動が実施されていることをなんらかの経路で認知した上で、主体的に参加意志を表明し、かつ安価とは言いがたい料金を支払う必要がある。そうだとすれば、ワークショップ参加者の大部分は、既にディープ・エコロジー的な理念にある程度共鳴している可能性が高いということになる。逆に言えば、ワークショップの運営システム上、ディープ・エコロジー運動にはそれほど共感していない人々や、

そもそもエコロジー自体にそれほど関心を抱いていない人々といった、運動体外部にいる全体社会の構成員たちは構造的に排除されているということである。

第3項：ワークショップの活動内容

ワークショップは、通常、ファシリテーター（講師）の指導の下でおこなわれる。マニュアルによれば、ファシリテーターには、参加者が自由にエクササイズを実践できるように促す一方で、あらかじめ考えたプログラム構成から極端に脱線しないようにすることが求められる。ファシリテーターは、ほとんどの場合、主催者本人が担当することになるが、マニュアルでは、ファシリテーターを担当するために要求される専門的スキルはないと述べられており、要求されるのは唯一「自分自身の感情と取り組んだことがあるかどうかで...生命絶滅の危機に対する自分の内的感情の深みと直面し、そうした強烈な感情への恐怖を乗り越えた経験」⁽⁵⁵⁾のみであるとされている。マニュアルには、プログラム構成の一例として以下のスケジュールが掲載されている。

- 09：00 受付と会場案内など
- 09：15 準備運動／呼吸法／ゲーム／チャンティング（詠唱）他
- 09：30 開会のあいさつと導入説明
- 09：45 導入エクササイズ
- 10：00 いのちの出会い
- 10：20 進化の記憶
- 11：30 一人きりで自然のなかへ／盟友探し
- 12：30 昼食とお面作り
- 13：45 声と体をほぐす／全員集合
- 14：00 選んだ生命形態への瞑想
- 14：15 小グループによる盟友の自己紹介
- 14：30 〈全生命の集い〉儀式のための場を開く
- 16：00 ペアになってディープ・エコロジー的な生き方を探る
- 16：15 「地球のための活動」についてのブレインストーミング
- 16：25 ペアになってひとりができることとこれから一年にどんなサポートが必要かを探る
- 16：40 全体の輪で報告とフィナーレ感想，ハミング・ビー，歌など

マニュアルによれば、以上のプログラムは、4つの段階に沿って構成されている。4つの段階は、それぞれ①「嘆き悲しむこと」、②「思い出すこと」、③「他の生命に成り代わって話すこと」、④フォローアップと呼ばれている。以下では、それぞれの段階における具体的な実践内容を検討していこう。

① 嘆き悲しむこと

「嘆き悲しむこと」に分類される実践は、「この世界に起こっていることを自分のなかで痛みとして感じ...この痛みを認め、よく吟味し、解き放つ」⁽⁵⁶⁾ためのものであるとされている。具体的なエクササイズとしては、上記スケジュールのなかの「導入エクササイズ」と「いのちの出会い」が該当する。「導入エクササイズ」では参加者が3～4人のグループに分けられ、各自5分から15分程度かけて、「自然界の实在を強烈に味わった特別な体験や、この世界に起きていることについて強く痛みを実感した体験」⁽⁵⁷⁾を語るよう指導される。マニュアルではないが、同様のエクササイズを紹介しているメイシーの著作によれば、語りを聞いた他の参加者は、相手に対して「ええ、聴いていますよ」ということになっているとされている。

「いのちの出会い」では、参加者が言葉を使わないコミュニケーションを実行するように促される。参加者は、部屋や会場のなかを動き回り、ファシリテーターが合図するたびに立ち止まる。そして、そのときに向かい合った人の手を握り、相手を抱擁する。この際、参加者は相手に対して、全身全霊で注意を注ぐように努力する必要があると指導される。このエクササイズの直前、あるいは最中には以下の文章がファシリテーターによって読み上げられる。

この人が絶滅の危機に瀕した星の上に生きていることを、あらためて思い起こします。この人は核戦争か、でなければ地球を汚染しつつある有害物質のひとつで死ぬかもしれません。二人としない大切なその顔をよくみてください。...まだものがみえるその目。それはただの節穴ではありません。...肌もまだ無傷です。...この人にそんなひどい苦しみや恐怖を味わわせたくないという、自分の願いを意識し、その願いの強さを感じ、その願いの強さを感じてみます。...呼吸を続けて。...次に、自分がこの人と一緒に死ぬことになるかもしれないという可能性を思い浮かべます。...これが最後にみる顔...これが最後にさわる手...そのとき、この手があなたを助け、慰め、水を飲ませてくれるかもしれません。...この可能性を意識したとき沸きあがってくる、この人に対する気持ちを、ありのままに感じてください。そこではじめて味わう、大きないたわりとつながりの感覚をそのまま受け入れてください。⁽⁵⁸⁾

マニュアルによれば、以上の他に「動物哀歌」を参加者に読み上げさせるというエクササイズがおこなわれることもある。その内容は下記のようなものだ。

ワニよ、もときた泥のなかへ沈もう。豊かな原初の海、私たちの分子が生まれたゆりかごのなかへ、ゆっくりと浸ろう。もう一度、泥のなかでころげまわろう。私たちがおまえの沼地を干上がらせ、アスファルトでおおい、ついには業火で焼き尽くしてしまうまえに...今と同じように世界が終わろうとしていたとき、ノアも動物たちのリストを作った...いまわたしたちも、動物たちの名を読み上げている...おまえたちの足跡がどんどん薄れてゆく。待つて—こんな苦しい時代。私たちが破壊した世界に、私たちだけを置き去りにしないでくれ。⁽⁵⁹⁾

以上のような、やや黙示録的雰囲気を感じさせる文章が読み上げられる合間に、絶滅種、あるいは絶滅危惧種の名前が読み上げられ、ひとつの動植物が読み上げられる度に拍子木が打ち鳴らさ

れる。マニュアルによれば、このようにして、「その種に最期を告げ…敬意を払い、一同の思いを集中する」⁽⁶⁰⁾ことがこのエクササイズのものである。マニュアルには、「参加者の表現が古来の死者を悼む哀哭そっくりになることも少なくない」⁽⁶¹⁾と書かれている。

以上の実践は、参加者に絶滅危惧種への哀悼や、今日の世界問題に対する危機意識を共有させ、ワークショップの世界観に順応させていくことで、同朋意識を形成しようとするものとして解釈することができるだろう。環境危機に対する苦悩を告白しそれを承認すること、抱擁という濃密な対面的コミュニケーションを実行することは、こうした同朋意識をさらに強化し、参加者同士の関係性を、たまたまその場に集合した他者という関係から、共有の理念を抱いた仲間としての関係へ転換していく機能を果たすことになるのではないかと考えられる。

② 思い出すこと

「思い出すこと」に分類されるエクササイズは、「地球上の生命の有機的発現である私たち」のルーツを意識的に回想し、「地球としての私たちが四十五億年間（宇宙としては百五十億年間）にわたってくり広げてきた物語を呼び戻す」⁽⁶²⁾すためのものであるとされている。上記のスケジュールのなかでは「進化の記憶」が該当する。「進化の記憶」では、参加者をリラックスできるような体勢にさせた状態で、ファシリテーターが、宇宙創成から人間が誕生するまでの歴史を叙事的に表現した文章を読み上げる。以下の引用が示すように、この文章には、宇宙創成から現在に至るまで人間が連続性を保って存在してきた、という世界観が示されている。

私たちの惑星地球が誕生するずっと前、宇宙が生まれた神秘のときまで、遡ってみましょう。原初の沈黙のときまで、135億年を遡るのです…最後に、稲妻の電光がこの分子スープを受胎させ、生命への冒険が開始したのです。最初の細胞が生まれました。あなたはそこにいました。私もそこにいました。なぜなら、私たちのからだすべての細胞は、この出来事から連続とつづく子孫なのですから。私たちの共通の祖先であるこの細胞を通して、私たちは地球上のあらゆる植物や動物とつながっているのです。…最初、私たちは藻類となり、次に原始的な緑色植物となり、それから最初の単純な動物になりました。⁽⁶³⁾

以上の引用に続いて、魚類の誕生から爬虫類等の誕生が語られ最終的に人間が誕生するまでの進化の過程が語られる。この文章が読み上げられるなかで、参加者は個々の過程を身体的に表現するように求められる。たとえば、爬虫類に関する文章が読み上げられているときにはトカゲのように身体を動かすように促される。マニュアルによれば、このような身体運動によって「参加者は…自分自身の進化のプロセスを、いわば“実感”していく」⁽⁶⁴⁾ことになるという。

この段階の実践は、前節で検討したワークショップの理念、すなわち人間と自然は本来的に一体でありそれに気づく契機は自己に内在しているという理念を、参加者に身体的に表現させることによって、まさに体得させようとするものとして理解することができるだろう。

③ 他の動物に成り代わって話すこと、およびフォローアップ

マニュアルによれば、このワークショップのクライマックスに相当する「他の生命に成り代わって話すこと」では、「思い出すこと」によって経験された普遍的連続性の感覚を基盤にして、実際に他の生命形態との同一化をおこなうとされている。まず、参加者は屋内外で瞑想をおこないながら「他の生命形態が乗り移ってくるのを」待つように指示される。他の生命形態とは、動植物だけではなく、沼や溪谷といった生態系の一部も含まれる、とマニュアルには記載されている。マニュアルに記載されているこのワークショップの体験録によれば、オオカミ、ガンなどの他、小麦、山、熱帯雨林などと同一化する参加者がいたという。下記の例は、山との同一化を果たした参加者が、そのときの心情を語った文章である。

川岸の温かい砂の上へしずかに腰をおろすかおろさないかのうちに、私に乗り移ろうと待ち構えている存在があるのに気づいた。山だ。私はリラックスして、思いきり山を吸い込んだ。...自分の岩盤が深く深くのびて、熱い地殻に届くのを感じた。私の足場はものすごく広く、堅固だ。嵐が私の表面をなめていっても、私の皮膚である木々が波立つに過ぎない。ときたま起こる地震さえ、私のからだを震わせて、自分の力に自信が増すばかり。私はいにしへの存在。...ところが人間たちは私の山腹にうごめくアリのように、でしゃばりで手に負えなくなることがある。彼らは私の骨をえぐりだし、肉をそぎ、私を住処とするものたちに危険をもたらす。(65)

同一化する対象が定まったら、〈全生命の集い〉と呼ばれるエクササイズをおこなう準備が始められる。まず、参加者はそれぞれが同一化した対象を模したお面を作るように指示される。場合によっては、お面ではなく、ボディ・ペイントなどをおこなうこともある。

お面の作成が終了すると、参加者は円状に並んだ上で、それぞれ自分が同一化した対象になりきって自己主張するように促される。体験録によれば、自己主張は、以下のようなかたちで進められていくようだ。「私はヒメアオバトです。クーツ。私の住処は最後の熱帯林。巨大な木々と涼しい緑色の光のなかで、やさしく歌います。でも、もう答えがないの。私の一族はどこ？ みんなどこへ行ったのかしら？ 聞こえるのは自分の鳴き声のこだまだけ。こわいわ。だからここへきました」。これに対して他の参加者は「よくわかります、ヒメアオバトさん」と答える(66)。この過程を参加者全員が語り終えるまで繰り返す。

以上のような語り終了すると、参加者は、自らが作成した仮面を薪にくべて燃やしていく。こうすることで、自分が同一化していた対象を、再び自然界へ「解き放つ」ことになる、とマニュアルでは述べられている。この際、各人は自らが同一化していた対象に、「ありがとう、コンドル」などといいながら感謝の意を表明する必要があるとされている。

この段階での実践は、②「思い出すこと」で身体化されたワークショップの理念に基づいて、仮想的に自然界の諸物を含んだ共同体を構築しようとするものとして理解することができる。むしろ、こうした共同体は、あくまで参加者の演技に基づく架空の共同体である。しかし、参加者に自然物と人間という二重の役割を背負わせることによって境界的な状況を作り出し、一種のコミュニタスが現出するように設計されている、というようにヴィクター・ターナー的な儀

礼過程のひとつとして解釈することも可能であるように思われる⁽⁶⁷⁾。いずれにしても、これらのプロセスを通じて、参加者間に極めて親密な関係が構築されることになる可能性は高いように思われる。たとえば、ある参加者は、以下のように述べている。すなわち、「なんともいえないいい気持ちだ。まるで全員がひとつの生き物になったような感じがする」⁽⁶⁸⁾。

以上の一連の行為が終了した後、ワークショップは最後の段階、フォローアップへ進行する。参加者はワークショップの体験を振り返って、感じたことや内側に沸き起こった反応を言葉にするよう促される。各人の体験談が語り終えられた後、つぎにワークショップの体験を踏まえて、今後どのように行動するのか、ライフスタイルをどのように変えていくのか、どのようにして互いに助け合うのかといった点についての計画を立てるように指示される。なお、フォローアップの最中には、歌やダンスなどによって場を盛り上げるように工夫すると効果的である、とマニュアルには記されている。

以上のように、ワークショップのプロセスは、全体として、参加者の間にある種の親密な空間を構築しようとするものとして理解することができるだろう。しかし、この親密な空間は、ワークショップ外部との関わりが断たれた空間でもある。これまでみてきたように、ワークショップのプロセスにおいては、外部の他者と交流する機会はほとんどみられず⁽⁶⁹⁾、その最初期の段階から既存の文化的枠組みを放棄するように促され、新しい価値観、世界観を身に着けるように誘導される。最終段階で、参加者に今後の社会との関わり方を考えさせる段階が設けられてはいるものの、実際にどのように社会と関わっていくかについてワークショップは直接関知せず、個人個人の判断に任せるというかたちをとっている。このような点から言えば、ワークショップは公共的志向性が相対的には低く、総合的にみて、私事的傾向が強い商業としてスピリチュアリティが展開された事例として位置づけることが適切であるように思える⁽⁷⁰⁾。

第4節：まとめと考察

本稿の課題は、ディープ・エコロジー運動における活動の特徴、およびスピリチュアリティとの関連性を明らかにすることであった。活動の性格という点については、「アース・ファースト！」の場合、ネットワーク的な構造を基盤として外部社会との積極的な交渉をおこなう活動形態を特徴としていた。これに対して「全生命の集い」の場合は、商業的な構造を基盤として参加者個人の自己変容を追求するという活動形態を特徴としていた。比較していえば、前者の場合、相対的には持続的な枠組みから公共的次元へ接近するという形態をとっているが、後者の場合は、より一過的な枠組みのなかで私事的な体験を追求するという形態をとっていた。

スピリチュアリティとの関連性という点については、「アース・ファースト！」の場合、意識変容に伴う自己聖化という観念には否定的であり、その意味では、スピリチュアリティとの連続性は弱められたかたちで理念が構成されていた。これに対して「全生命の集い」の場合は、意識の進化による自己の成長という観念を積極的に導入しており、その意味では、スピリチュアリティとの強い連続性がみられた。

スピリチュアリティに基づいた環境保護活動の形態的特徴
—ディープ・エコロジー運動を事例として—

「アース・ファースト！」		「全生命の集い」
自然の神聖さを強調するものの 自己変容体験には否定的	理念	自然との一体性を中核とした 自己変容体験の重視
雑誌・集会・キャンペーンを媒介と したネットワークの構造	運営構造	一回起的な共同行為を媒介 とした商業的構造
対立的ではあるが 公共的次元との積極的関与を志向	活動内容	親密な小集団内での 私事的な自己変容体験の追及を志向

以上の結果は、スピリチュアリティに基づいた活動形態の性格について考える上で、どのようなインプリケーションを持つだろうか。結果的にみれば、相対的には凝集性の高い組織構造のもとで外部社会との積極的交渉をおこなう「アース・ファースト！」の方が、スピリチュアリティとの連続性は低く、一過的な商業的構造のもとで私事的な自己変容体験を求める「全生命の集い」の方がスピリチュアリティと強く連続していた。換言すれば、本稿で得られた結果は、スピリチュアリティは社会運動化する方向との親和性が低く、商業化する方向との親和性がより強いということを示唆していると解釈することができるかもしれない。つまり、エコロジーの領域においても、全体的な傾向としては、島菌がいうように「持続的な共同行為による、公的政治的関与に親しみにくい」⁽⁷¹⁾という性格が強いということを示唆しているのかもしれない。

しかし、本稿では以上のような点を示唆するにとどめたい。というのも本稿には下記のような限界があるためである。まず、本稿はエコロジーとスピリチュアリティが結合した活動の一部を扱ったに過ぎない。はじめにでも述べたとおり、ディープ・エコロジー運動に関連する活動だけでも、代替的コミュニティ建設活動など、複数の活動形態が存在している。これらの活動を取り上げれば、スピリチュアリティとその活動形態について本稿とは異なる分析結果が得られるかもしれない。つぎに、本稿では、活動の性格に寄与する可能性のある他の変数、たとえば団体の資源動員力、構成員の属性、団体が成立した社会的状況といった変数を十分に考慮することができなかった。結果として、活動団体の形態的特徴が、理念とスピリチュアリティとの関連性のみを独立変数としていると明確に示すことはできなかった。以上の諸点に留意した調査によって、エコロジーとスピリチュアリティの関係性についてのより詳細な実態を明らかにすることが今後の課題である。

註

- (1) 本稿では、「スピリチュアリティ」の中核的要素は自己聖性の観念にあり、外在的な自然に対する聖性の付与を特徴とする「自然宗教」とは区別可能であると捉えている。こうした理解はニューエイジとネオ・ペイガニズムを対比したヨークのものに近い。しかし、たとえば島菌のように、内在的な聖性と外在的な聖性はしばしば相互に入れ替わり内即外という聖性の観念に帰着するとして、この区別に意義を唱える研究者もいる。近年の研究動向では、どちらかといえば、スピリチュアリティを後者のように、それほど特定化しないかたちで規定する傾向が強

いように思われる。こうした規定の仕方には、対象領域の多様性を掬い上げることができるといったような利点が存在することは確かだが、逆に、分析的な記述が困難になる（つまり何がスピリチュアルで何がそうでないのかを明示的に示すことが難しくなる）可能性が高く、より限定されたかたちで規定する方がよいのではないかと筆者は考えている。以下を参照。

Michael York, *The Emerging Network: A Sociology of the New Age and Neo-Pagan Movements*, Boston: Rowman & Littlefield, 1995. 島菌進『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性—』秋山書店, 2007年。

- (2) 弓山達也「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」(『宗教研究』84号, 2010年)。
- (3) 島菌進『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性—』秋山書店, 2007年。
- (4) 大谷栄一「つながりに気づき, つながりを築く—ガイアネットワーク新宿の試み—」(梶尾直樹編『スピリチュアリティを生きる』せりか書房, 2002年)。
- (5) 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂, 2012年。
- (6) John P. Bartkowski and Swearingen W. Scott, “God Meets Gaia in Austin, Texas: a Case Study of Environmentalism as Implicit Religion.” in R.S. Gottlieb ed., *Religion and the Environment*, New York: Routledge, 2010.
- (7) ディープ・エコロジー運動とは、1972年にノルウェーの哲学者、アルネ・ネスによって提唱された環境保護運動のあり方のひとつである。ネスによる提唱以降、少なくとも1980年代になるまでは、ネス、ビル・デヴァル、ジョージ・セッションズ、アラン・ドレングソンといった、一部の環境思想家による思想運動として展開されていた。しかし、1980年、アースデイ10周年記念シンポジウムにおいてセッションズがディープ・エコロジー運動を紹介したことを契機として、運動は北アメリカ・オーストラリアを中心として広範に普及することとなった(本稿で扱う、ジョン・シードとデイブ・フォアマンも、おおむねこの時期からディープ・エコロジー運動に関して言及し始めている)。以下を参照。Warwick Fox, *Toward a Transpersonal Ecology: Developing New Foundations for Environmentalism*, Boston: Shambhala Publications, 1990=ワーウィック・フォックス『トランスパーソナル・エコロジー—環境主義を超えて—』(星川淳訳)平凡社, 1994年。
- (8) ただし、たとえば下記のような、「ディープ・エコロジー運動」とスピリチュアリティに関連性がみられると指摘する研究自体は存在する。しかし、これらの研究は①そもそもディープ・エコロジー運動に触れている箇所自体が極めて少なく、②用いている資料も、ネスによる著作とデヴァルとセッションズによる著作の2つに限られている点で、詳細な研究とは言いがたいものである。以下を参照。島菌進『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性—』秋山書店, 2007年。Paul Heelas, *The New Age Movement: The Celebration of the Self and the Secularization of Modernity*, Oxford: Blackwell, 1996.
- (9) たとえば環境史家の海上知明は、ワークショップ「全生命の集い」をディープ・エコロジー運動の理念と最も一致した活動であるとみなしている。また、環境保護運動を宗教学的観点から扱っているブロン・テイラーは、ディープ・エコロジー運動を「アース・ファースト!」によって代表させている。以下を参照。海上知明『環境思想—歴史と体系—』NTT出版株式会社, 2005年。Bron Taylor, *Dark Green Religion: Nature Spirituality and the Planetary Future*, California: University of California Press, 2010.
- (10) 具体的な例としては、ピーター・バーグによる「緑の都市」プロジェクトが代表的である。このプロジェクトは、450におよぶボランティアグループと協同して、サンフランシスコ周

辺に、人間と自然が一体となった「生命地域 bioregion」を建設することを目的としたもので、具体的な活動内容としては、サンフランシスコ周辺の地域生態系に関する講義の実施、持続可能な農法の実地訓練、環境に関連する社会問題を主題とした会議の実施などが行われている。また、それほど頻繁ではないが、ネイティブ・アメリカンの祭祀を模したフェスティバルなども実施されている。このプロジェクトに関しては、<http://www.planetdrum.org/>を参照（2014年1月8日閲覧）。

- (11) 具体的な例としては、アンニャ・ライトによるオーストラリア議会選挙への出馬や、シャーリーン・スプレットナクによる政治活動などが挙げられる。以下を参照。アンニャ・ライト、辻真一『しんしんと、ディープエコロジー—アンニャと森の物語—』大月書店、2010年。キャロライン・マーチャント『ラディカルエコロジー—住みよい世界を求めて—』（川本隆史・水谷広・須藤自由児訳）産業図書、2004年＝Carolyn Merchant, *Radical Ecology: The Search for a Livable World*, New York: Routledge, 1992.
- (12) 彼らの言説が具体的に示されている文献としては、下記のようなものが挙げられる。①Arne Naess, “The Shallow and the Deep, Long-Range Ecology Movement. A Summary,” *Inquiry*16, 1973, pp. 95-100 = アルネ・ネス「シャロー・エコロジー運動と長期的視野を持つディープ・エコロジー運動」（井上有一訳）（アラン・ドレングソン、井上有一編『ディープ・エコロジー生き方から考える環境の思想』昭和堂、2001年）。②Arne Naess, *Ecology, Community, and Lifestyle: Outline of an Ecosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1989. ③Bill Devall and George Sessions, *Deep Ecology: Living as if Nature Mattered*, Salt Lake City: Peregrine Smith Books, 1985. 順番に、①は「ディープ・エコロジー運動」の語が初めて文章の形で示された文献、②は創始者であるネスによる「ディープ・エコロジー運動」についての論考、③は、ネスの後継者であるデヴァルとセッションズによる運動の解説である。この内、運動の普及に最も貢献したのは③であるといわれている。以下を参照。Warwick Fox, *Toward a Transpersonal Ecology: Developing New Foundations for Environmentalism*, Boston: Shambhala Publications, 1990 = ワーウィック・フォックス『トランスパーソナル・エコロジー—環境主義を超えて—』（星川淳訳）平凡社、1994年。
- (13) たとえば、Steve Bruce, “The New Age and Secularization,” In S. Sutcliffe and M. Bowman(ed.), *Beyond New Age: Exploring Alternative Spirituality*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2000. 櫻井義秀編『叢書・現代社会のフロンティア③ カルトとスピリチュアリティ—現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ—』ミネルヴァ書房、2009年など。
- (14) たとえば、島藺進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂、2012年。小池靖『セラピー文化の社会学—ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ—』勁草書房、2007年。葛西健太「正直であること、仲間であること—「飲まない生き方」を分かち合う共同体へ—」（榎尾直樹編『スピリチュアリティを生きる』せりか書房、2002年）。
- (15) Dave Foreman, *Confessions of an Eco-Warrior*, New York: Harmony Books, 1991.
- (16) In Dave Foreman, *Confessions of an Eco-Warrior*, New York: Harmony Books, 1991, pp. 26-27.
- (17) Ibid., p. 18.
- (18) Ibid., p. 33.
- (19) Ibid.

- (20) Ibid., p. 49.
- (21) Ibid., p. 29.
- (22) Ibid.
- (23) Ibid.
- (24) Ibid., p. 34.
- (25) In Martha Lee, *Earth First!-Environmental Apocalypse*, New York: Syracuse University Press, 1995, p. 139.
- (26) Ibid. また、環境倫理学者のロデリック・ナッシュは 1985 年時点での団体規模を 12000 人と見積もっている。以下を参照。ロデリック・ナッシュ『アメリカの環境主義—環境思想の歴史のアンソロジー—』（松野弘監訳）同友社，2004 年 = Roderic Nash, *American Environmentalism. Third Edition*, McGraw-Hill, 1990.
- (27) Dave Foreman, *Confessions of an Eco-Warrior*, New York: Harmony Books, 1991, p. 21.
- (28) Martha Lee, *Earth First!-Environmental Apocalypse*, New York: Syracuse University Press, 1995.
- (29) Bron Taylor, “The Religion and Politics of Earth First!” *The Ecologist* 21(6), 1991, pp. 258-266.
- (30) In Martha Lee, *Earth First!-Environmental Apocalypse*, New York: Syracuse University Press, 1995, p. 51.
- (31) Bron Taylor, “The Religion and Politics of Earth First!” *The Ecologist* 21(6), pp. 258-266.
- (32) Ibid., p. 96.
- (33) Ibid., p. 120.
- (34) 約 2 年間におよぶ。
- (35) ジュリア・ヒル『一本の樹が遺したもの—ルナの遺産—』（きくちゆみ・河田裕子訳）現代思潮新社，2003 年 = Julia Hill, *The Legacy of Luna*, New York: Harper, 2000.
- (36) エドワード・アビー『爆破—モンキーレンチギャング—』（片岡夏実訳）築地書館，2001 年 = Edward Abbey, *The Monkey Wrench Gang*, Edinburgh: Canongate, 1975.
- (37) Dave Foreman and B. Haywood(ed.), *Ecodefense: A Field Guide to Monkeywrenching. Second Edition*, Tuscon: Ned Ludd Books, 1989, p. 11.
- (38) Martha Lee, *Earth First!-Environmental Apocalypse*, New York: Syracuse University Press, 1995.
- (39) アンドリュー・ドブソン『シリーズ〈環境・エコロジー・人間〉④ 緑の政治思想—エコロジズムと社会変革の理論—』（松野弘訳）ミネルヴァ書房，2001 年 = Andrew Dobson, *Green Political Thought. Second Edition*, New York: Routledge, 1995.
- (40) Dave Foreman and B. Haywood(ed.), *Ecodefense: A Field Guide to Monkeywrenching. Second Edition*, Tuscon: Ned Ludd Books, 1989.
- (41) たとえばディーブ・エコロジストによる以下の著作では、裁判、投獄の経験が語られている。Dave Foreman *Confessions of and Eco-Warrior*, New York: Harmony Books, 1991. アンニャ・ライト, 辻真一『しんしんと, ディーブエコロジー—アンニャと森の物語—』大月書店, 2010 年。

- (42) たとえばリュック・フェリ 『エコロジーの新秩序—樹木、動物、人間—』 (加藤宏幸訳) 法政大学出版局, 1994年=Luc Ferry, *The New Ecological Order*, Chicago: University of Chicago Press, 1992.
- (43) Joanna Macy, "The Council of All Being," in B. Taylor. *Encyclopedia of Religion and Nature*, New York: Continuum, 2008.
- (44) ジョン・シード他『地球の声を聴く』 (星川淳監訳) ほんの木, 1993年, 22頁=John Seed, Joanna Macy, Pat Fleming, and Arne Naess, *Thinking Like a Mountain: Towards a Council of All Beings*, Philadelphia: New Society Publishers, 1998.
- (45) 同上, 26頁。
- (46) 同上, 68頁。
- (47) 同上, 28頁。
- (48) 同上, 29頁。
- (49) 同上, 28頁。
- (50) 同上, 69頁。
- (51) 同上, 72頁。
- (52) 同上, 177頁。
- (53) <http://www.rainforestinfo.org.au/deep-eco/schedule.htm> および <http://www.joannamacy.net/>を参照。なお、ディープ・エコロジー運動と直接関係しているわけではないが、日本には、この種のワークショップの運営それ自体を組織目的とした環境NGO「ビーネイチャースクール」が存在している。「ビーネイチャースクール」に関しては、<http://be-nature.jp/>を参照のこと。いずれも2014年1月8日閲覧。
- (54) たとえば <http://www.rainforestinfo.org.au/deep-eco/fliers/Perth13.pdf> に掲載されているパンフレットなど。2014年1月8日閲覧。なお、注31で挙げた「ビーネイチャースクール」の場合は、シードやメイシーらの場合に比べて体系化されたコースと料金システムを構築している。コースは2時間30分の「入門コース」、8時間の「集中コース」、3日間に渡る「連続コース」、ファシリテーター (講師) 育成を目的とした「ワークショップのつくり方コース」に分けられており、それぞれの料金は、3000円 (入門)、22000円 (集中)、35000円 (連続)、58000円 (つくり方) となっている。
- (55) ジョン・シード他『地球の声を聴く』 (星川淳監訳) ほんの木, 1993年, 179頁。
- (56) 同上, 182頁。
- (57) 同上, 184頁。
- (58) Joanna Macy, *World as Lover; World as Self*, Berkeley: Parallax Press, 2007(1991), pp. 128-129. = ジョアンナ・メイシー『世界は恋人世界はわたし』 (星川淳訳) 筑摩書房, 1993年。
- (59) ジョン・シード他『地球の声を聴く』 (星川淳監訳) ほんの木, 1993年, 130-136頁。
- (60) 同上, 186頁。
- (61) 同上, 186-187頁。
- (62) 同上, 189-190頁。
- (63) 同上, 84-90頁。
- (64) 同上, 190頁。
- (65) 同上, 142-143頁。

- (66) 同上, 148 頁。
- (67) ヴィクター・W・ターナー『儀礼の過程』(富倉光雄訳) 新思索社, 1996 年。
- (68) ジョン・シード他『地球の声を聴く』(星川淳監訳) ほんの木, 1993 年, 161 頁。
- (69) この点では, 同種のセミナーとはいえ, 勧誘をプログラムに組み込んでいる自己啓発セミナーとは対照的である。以下を参照。小池靖『セラピー文化の社会学—ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ—』勁草書房, 2007 年。
- (70) ただし, このワークショップを体験したある女性の顛末について語られた下記引用が示すように, このワークショップを契機として, 参加者が熱心な社会活動になるという可能性は存在している。「その時の旅のメンバーにアヤ(和田彩子)がいた。…彼女はぼくのゼミの学生と仲良しで, ツアーに興味を持って研究室に来た。『私, 環境問題なんか興味ないんですけど, それでも行っていいんですか?』って, まるで怒っているみたいに聞くの。ともあれ, ツアーに行ってから, 彼女はガラッと変わった。ナマケモノクラブ創立の時には中心メンバーとなり, やがて大好きなエクアドルに移り住んで, 先住民の青年と結婚して子どももできて, 今では家族といっしょに自分なりのエコビレッジをつくっている」。以下を参照。アンニャ・ライト, 辻真一『しんしんと, ディープエコロジー—アンニャと森の物語—』大月書店, 2010 年。
- (71) 島菌進『精神世界のゆくえ—宗教・近代・霊性—』秋山書店, 2007 年, 353 頁。

The Structure of Spiritually Based Environmental Movements: The Case of Deep Ecology

Junichiro KURODA

Scholars of contemporary religion are increasingly interested in the relationship between ecology and spirituality.

In this article, the author analyzes two spiritually based ecological initiatives: the activities of the environmental protection group Earth First! and the ecological workshop The Council of All Being, which are often regarded as practices typical of the Deep Ecology Movement. The analysis focuses on the following three questions. ①How do the ideals behind both initiatives relate to spirituality? ②To what extent are these initiatives institutionalized? ③How do these initiatives interact with the public sphere? This paper reveals that The Council of All Being is highly representative of a typical contemporary spirituality with its ideal of self-consecration through individually transformative experiences. On the other hand, the activities of Earth First! do not have a strong connection with contemporary self-oriented spirituality. Rather, they are based on the more naturalistic kind of spirituality: the belief in the sacredness of all natural beings. This paper also shows that whereas The Council of All Being is a privatized practice based on its commercialized structure, Earth First! conducts a relatively public campaign using its organizational networks.